
鈴木Jr誕生！(鈴木×樹里、死々若)

にゃくにん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴木Jr誕生！（鈴木×樹里、死々若）

【Nコード】

N1844B

【作者名】

にゃくにん

【あらすじ】

タイトル通りでございます。凍矢×小兎、幽助×蛭子も入ってます。

ピンポン と鈴木家のインターホンが鳴る。

「いらつしゃい！待ってたのよ！」

出迎えたのは樹里。

「樹里、元気だった？」

小兎が樹里に話しかけると、樹里がウインクした。

「もつちろくん！さ、上がって上がって」

ここから会話がスタート！

「、それで鈴木さん、優しい？」

小兎が興味津々、と言った様子で樹里に聞くと樹里が苦笑した。

「それがねえ、優しいんだけどちよつと問題が・・・」

「あ、そう言えば沙里ちゃんはどこどこ？見たーい！大きくなっただけでしょうね」

蛍子が楽しそうに言うと、樹里が辺りを見回す。

「うんっ・・・てあれ？さっきまでこの辺にいたのにな」

鈴木ちゃん！沙里は？皆来たよ！」

「おお、よく来たな。さあ見てくれ、これが娘の沙里だ。」

奥にいたらしい鈴木が腕に娘をかかえて出てきた。

「ママ見て見て〜！パパに着せて貰ったの〜v」

ずいぶん大きい白衣を着た女の子が無邪気に笑っている。

「も〜鈴木ちゃん！沙里にあれほど白衣着せないでって言ったのに〜！〜！」

鈴木と同じくせのある金髪で、

顔と耳と尻尾は樹里似のとても可愛らしい女の子である。

「どうだ似合うだろう？さすが私の娘！」

「可愛い？」

「おお！もちろんだとも！！お前が一番可愛いぞ！！」
言いながら娘を床に下ろす。

「あ、コラ！沙里ったらそんな格好でえ〜！」

樹里が慌ててキャツキヤと嬉しそうに逃げ回る沙里をつかまえて、
やっと白衣を脱がす。

「はははっそう怒るな樹里。美しい顔が台無しだぞ？」

「んも〜！それとこれは別！」

息を切らしながら樹里がどたばたと奥に駆け込んで、白衣を置いて
戻ってきた。

「なるほど、大変ね・・・」

「でしょ〜。どっちが子供なんだか。」

そう言いつつ樹里の顔には幸せそうな笑みが。

「沙里こっちへいらっしやい。」

樹里が言うつと

「は〜いっ」

沙里ははちきれんばかりの笑顔で駆け寄ってきた。

「さ、皆に挨拶しなさい。」

「こんにちは。いつも父と母がお世話になってます〜。」

ペコリと沙里がお辞儀をする。

「キヤ〜可愛いつ。こんにちは沙里ちゃん。」

と蛭子。

「・・・鈴木と違ってえらい礼儀正しい子だな〜。」

「ああ、信じられん。樹里のたまものだ。」

感心したように幽助と凍矢が言う。

「む！確かに樹里はよくやってくれているが、

やはりこの鈴木のおかげに決まっつていよう！」

「いや、それは絶対違う。」

声の方向を見ると死々若が入ってくる場所だった。

「よう死々若。」

「久しいな、元気そうで何よりだ。」

「若遊ば〜！あれ？大きくなっちゃったの？」

沙里がパタパタと死々若の側に駆け寄っつてすがりつく。

「沙里、友人達が来ておるのだ。しばらく待っている。」
死々若はしゃがんで、沙里の頭を優しく撫でながら言う。

「はい、また遊んでね？」

「うむ。後でな。」

沙里は残念そうな顔をしたが、すぐに大人しく奥へ引っ込んだ。

「あれ？何でまた小さいバージョンになる必要があるんだ？」

「沙里があちらの姿の方を気に入っておってな、

この姿になるとつまらないと言って怒るのだ。」

苦笑して言いながら死々若もソファに腰掛ける。

「はは、死々若はよくままごとや馬の真似事の相手もさせられているからなあ。」

鈴木が笑いながら死々若を見る。

「大変だな。だがよおさすがの死々若も沙里ちゃんには目がねーんだな。」

「うむ、昔と違いよく耐えてくれているので助かっている。」

「世話ぐらい自分でしろ、娘だろうが？」

凍矢が突っ込むのを聞いて鈴木が渋い顔をする。

「それがな、俺は研究も忙しいから、

何なら沙里を研究室に連れて行って研究傍ら面倒を見てやると言っているのだが、

こいつと樹里が反対してな。」

やれやれといったように鈴木が大げさにため息をつく。

「当たり前だ、この前など沙里の為だと言ってく完全警備マシーンを作っておったのだ。おかげで沙里に近づくことすら出来なかった。」

「鈴木・・・」

「親ばかここに極まれりだな・・・」

その場にいた男性陣の呆れたような視線が一斉に鈴木に注がれた。

「何だ何だその目は！だからちゃんと元に戻したではないかー！」

夕方

「お、そろそろ帰る時間かな？」

幽助が時計を見ながら呟く。

「そうだな、つい長居をしてしまったようだ。」

「そうか、また来てくれ。」

鈴木が言うと

「息災でな」

死々若丸も皆に声をかける。

二人が立ち上がった時。ふいにドアが開いて沙里が顔を覗かせた。

「若あ、遊ぼーよう！お話もう終わった？つまんない。」

「すまんな死々若、相手をしてやってくれ。」

「仕方あるまい。」

鈴木の言葉にポンつと死々若が小さいバージョンに変身する。

「わーい！若大好き！」

大喜びで死々若を抱きしめる沙里。

小さい時の死々若は、小さい沙里がちょうど抱えられる大きさなのだ。

「うっ・・沙里、苦しいぞ。」

「ね〜ね〜今日は沙里の旦那さん役やって〜！」

「うむ・・・」

「はは、死々若も大変だな。」

凍矢が微笑む。

最近では凍矢の無表情な顔を見ること自体が珍しくなってきた。

「将来本当に嫁さんに貰ったらどうだ？俺らの場合年齢はあまり関係ねーしな。」

幽助は冗談で言ったのだが、意外な言葉が返ってきた。

「うん！私大きくなったら絶対若のお嫁さんになるの！！」

沙里があっさりと言い切った。

「沙里・・そういう事をあまり軽々しく言っではいかんだぞ。」

死々若が赤くなっていたしなめる。

「・・・。」

「・・・。」

微笑ましい空気の中にどんよとした妖気が混ざった。

その発生源は鈴木である。

「おい、鈴木？どうした？」

凍矢がその妖気のおどろおどろしさに驚いて言う。

くっ・・・許せん、許せんぞ！！！！

その時の鈴木の前の中には死々若に対して嫉妬の炎が燃えだぎつていた。

「沙里、父がひがんでおるぞ。」

死々若が沙里に向かって囁く。

「あ、そっか。ねえ沙里は一人の人のお嫁さんにしかなっちゃ駄目なの？」

「ん？どういう事だ？」

と死々若。

「だって、沙里がパパと若のお嫁さんになれたらずっと一緒にいれるもん。」

「おお沙里・・・。」

「くるし・・・。」

感動のあまり娘を死々若ごと抱きしめる鈴木。

「沙里はパパもママも若も大好きだもん！」

死々若を抱えたまま沙里がさらに鈴木の胸に顔を埋めた。

「うっ・・・おいつ・・・。」

もがく死々若を微笑ましげに見ながら幽助たちはその場をあとにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1844b/>

鈴木Jr誕生！（鈴木×樹里、死々若）

2010年10月10日18時51分発行